

お彼岸のお墓参りにでかけ、お線香を手向けながら、亡き人ともう一度会いたい、触れあいたい、語り合いたいという思いが湧きあがってくることがあります。でもそれは、かなわないことです。亡き人は、二度と戻ってきません。

ヴィクトール・エミール・フランクというオーストリア生まれのユダヤ人の心理学者がいます。彼は、第二次大戦中ナチス・ドイツに捕らえられ、アウシュヴィッツをはじめ、数カ所の強制収容所に送られながら、その過酷な生活を耐え抜き生還をした人です。

フランクの代表的な言葉に、次のようなものがあります。

「私たちが人生に何かを期待するのではなく、
人生が私たちに何を期待しているか……。」

収容所での生活は過酷なものでした。朝起きて、歯を磨き、食事をとり、仕事に出かける…。家へ帰り、シャワーを浴び、夕食をとり、ベッドに入る…。そういった、ささやかであたりまえの事さえも、奪われていたのです。人生に期待しようにも、期待することのできない状況でした。

その時、フランクは、心の向きを百八十度変えたのです。

「人生が私たちに何を期待しているか……。」と。

「人生」の部分は、人によってさまざまでしょう。待っている家族であったり、中途で終わってしまっている仕事であったり、神であったり仏であったりするかもしれません。

それらの存在が、私たちに何を期待しているのだろうかと考えた時、あらゆるものを奪われた灰色の生活の一瞬一瞬が、それらの存在の期待に答え続ける、豊かなものに変わっていったのです。

そのようにして、フランクは、収容所生活を乗り越えていきました。

お彼岸にあたり、先ほどのフランクの言葉の「人生」の部分を変えて、「亡き人」に変えてみます。

「私たちが亡き人に期待するのではなく」

どうしても私たちは、亡き人に期待をしてしまいます。もう一度会いたい、触れあいたい、語り合いたい。でもそれは、かなわないことです。

だからこそ、心の向きを変えるのです。

「亡き人が私たちに、何を期待しているか……。」

先に逝^いった いとしい人が、遺^{のこ}された私たちに、どのように生きていってほしいのか……。そのことに思いを馳^はせた時、その人のいない日々が、亡き人の期待に答え続ける、豊かな日々になるのです。

お彼岸が、私たちの心の向きを変える、きっかけになることを願っています。

— 終 —